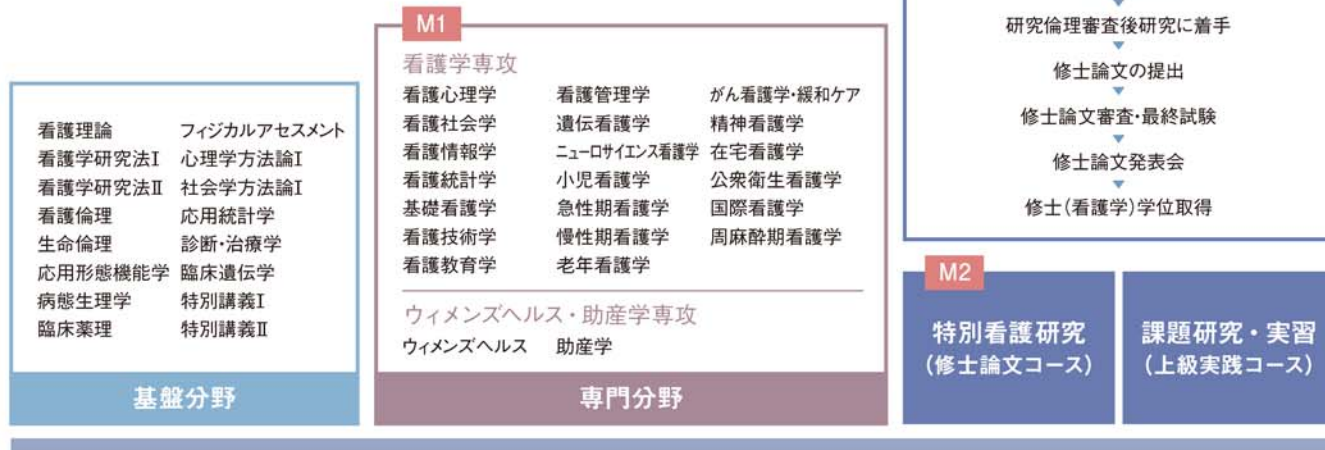
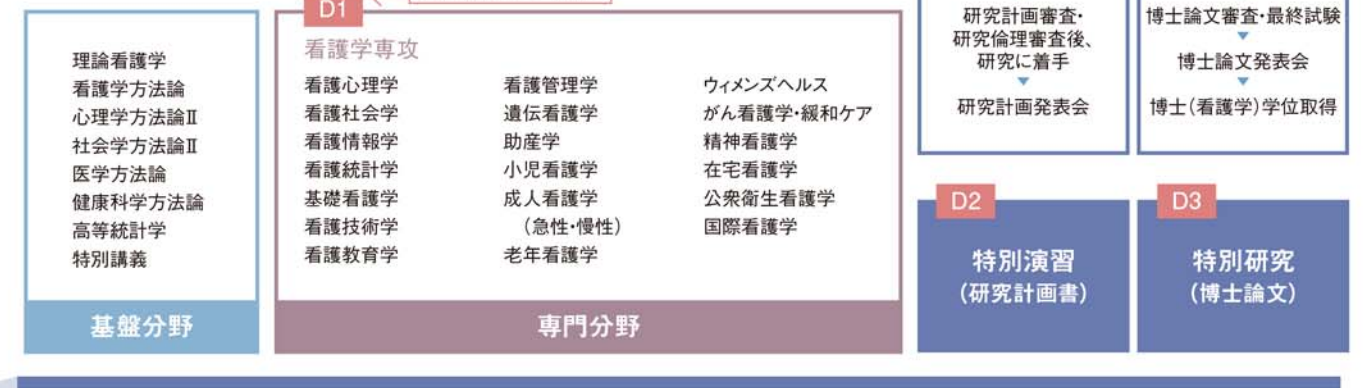


■ 博士前期課程 (修士課程)



■ 博士後期課程 (博士課程)



基礎看護学・看護技術学 教授 菱沼 典子

基礎看護学・看護技術学は、年代や健康課題に限らず、さまざまな看護現象をテーマに研究をしています。看護に共通した効果をデータによって示し、看護学の概念を豊かに醸成することを目指しています。人々の健康を守り高め、看護の何たるかを言語化し、看護技術を開発、普及するために、医療・保健現場での観察研究や介入研究、また、実験室での生理学的データの集積を行っています。

遺伝看護学 准教授 青木 美紀子

遺伝医療は親から子に伝わるという継承(heredity)だけでなく、多様性(variation)という視点が重要になります。「対象」「場」「時間」の多様性に富む中で、問題・課題に多角的に取り組む領域です。「遺伝」という視点をもって医療・社会を見つめなおすと、看護実践・研究はより深いものになります。高度な専門知識・技能・研究能力を習得し、確かなエビデンスと豊かな感性をもって遺伝医療を探究します。上級実践コースでは、遺伝医療の対象となる人々が情報を有効に活用して意思決定できるように、遺伝カウンセリング等の実践力向上に必要な知識・技術・態度を学びます。

精神看護学 教授 菅間 真美

精神科看護の急性期ケアから地域生活支援まで、ケア対象者のストレス(強み)に注目し、リカバリ(回復)を志向したケアを探究しています。質的研究方法と査読者の教育、アウトリーチ制度の評価などの研究を行っています。精神専門看護師(リエゾン看護師)や精神科訪問看護師との事例検討会、卒後教育、聖路加国際病院訪問看護ステーションからの精神科訪問看護などの臨床活動も行っていきます。

急性期看護学 准教授 宇都宮 明美

急性期看護は、急激な生命の危機に対して、専門性の高い看護ケアを提供することで、患者および家族に対して、生命と生活の質(QOL)の向上を目指します。過大侵襲を受けた生体反応とそれに伴う心理的な変化を理解し、看護に関する概念・理論と実践を探究します。集中治療室・救命救急センターを中心とした各医療施設での実習、急性・重症患者看護専門看護師との事例検討から高度実践能力を育成します。

看護教育学 教授 松谷 美和子

優れた実践力をもつ教育者(CNE)と優れた研究力をもつ教育者の両者を未来の看護系大学教員として育成しています。自主ゼミでは、様々な文献を読み、経験を話し合い、自己の変化を実感するような深い学びを体験しています。また、看護専門職としての資質や能力をいかに育むかを探究し、その成果を学部教育に活用しています。院生が取り組んできた研究テーマは、看護倫理教育、自己研鑽力の開発、視点取得と共感など多岐に亘ります。

ニューロサイエンス看護学 准教授 大久保 暢子

脳神経科学分野の自然科学研究を応用しながら、全人的に神経系疾患患者の看護を追求する学問領域であり、脳卒中、頭部外傷、パーキンソン病などの神経変性疾患による意識・運動・感覚障害をもつ患者の看護を専門とします。自然科学研究を応用しながらの先端の医療技術に添った看護を追求していくと同時に、重症脳神経障害患者のケアではないケアに焦点を当てた看護、生命倫理の観点からの看護も学び、高度な実践が出来る上級実践看護師およびエビデンスを創生する研究者を育成します。

がん看護学・緩和ケア 教授 林 直子

多岐にわたる治療を受けるさまざまな病期のがん患者とその家族の特徴の理解、また苦痛症状のある患者に対する看護介入など、がん看護や緩和ケアにまつわる概念・理論と実践方法を探究しています。上級実践コースでは聖路加国際病院 ならびにがん専門病院等における実習や、臨床の第一線で活躍するがん看護専門看護師による直接指導のもと、より高度な看護実践能力を育成します。

慢性期看護学 教授 林 直子

慢性長期的な経過を辿る疾患とともに生きる患者とその家族の特徴の理解、様々な療養過程と各期における看護介入など、慢性期看護に必須の概念・理論を学び実践方法を探究しています。実習では聖路加国際病院をはじめ各専門病院、大学病院における臨床実践を通じて、実践に適用可能なモデルの開発を目指します。

看護管理学 教授 吉田 千文

看護管理とは、人々が健康やQOLを維持向上していくように、多様な資源を活用し効果的に効率的に創造的に看護実践を行うこと、またそうした看護実践が組織的に進めるよう環境を整え実践者を支援することです。看護管理が初めて質の高い看護実践が生まれます。したがって全ての看護職者が看護管理学の知識とスキルを持つことが大切です。大学院での看護管理学領域では、看護独自の管理理論と管理方法について、個々の看護実践現場の問題を扱うミクロの視点と地域や国の制度を含むマクロの視点から探求します。

小児看護学 教授 小林 京子

少子化が進んだわが国の状況の中で、小児看護が求められる場面はさらに高度・複雑・長期化しています。大学院では、小児看護学全般の知識・理論を基盤としながら、高度な実践および研究を用いて子どもと家族のそれぞれの健康レベルに合った最大限の自立を促進する看護を探究します。小児看護専門看護師の活躍する医療現場においての実習、小児看護専門看護師や病院との共同研究なども行っています。また、近隣の看護師などとの事例検討会なども行っています。

成人看護学(急性・慢性 博士後期課程) 教授 林 直子

様々な疾病、障害とともに生きる成人期にある人と家族の看護を、急性期看護学あるいは慢性期看護学に関わる様々な理論に基づき探求します。集中治療領域でケアを受ける患者への看護介入の有効性の評価、慢性長期的な疾患を有する患者のセルフケアを支援するケアモデルの開発など、研究課題に応じた研究手法と関連する理論を修得します。

老年看護学 教授 亀井 智子

虚弱、認知症や慢性疾患などをもつ高齢者とその家族を対象とした看護やヘルスポモーションを探究します。修士論文コースでは、理論的基盤の上に、高度な研究能力の習得を、上級実践コースでは、高度看護実践能力を身につける老人看護専門看護師取得を目指します。博士課程では、テーマに関する文献レビューと概念分析を行い、研究方法やデータ解析の検討後に予備的研究をすすめ、博士論文の作成へつなげます。両課程とも、希望者は米国シガン大学老年医学センターでの研修が可能です。

在宅看護学 教授 山田 雅子

暮らしに軸足を置いた看護を総じて在宅看護と捉えます。訪問看護は勿論、介護保険施設やグループホームなど居宅等で展開される看護、医療機関での退院支援や外来、地域医療連携なども在宅看護実践です。病気は、地域で予防し治すもの、人々は暮らしの中で支えられるといった地域包括ケアの考えに基づき、看護はどう新しい役割を意識し、働き方を変えるのか。幅広く検討し、在宅看護実践能力の開発や研究能力の修得を目指します。

国際看護学 教授 大田 えりか

世界の人のよりよい健康維持・改善のために、グローバルヘルスの課題を学び、看護職者として、科学的根拠に基づく研究や活動を行います。新たな国連の目標であるSustainable development goalsを軸に、母子保健、感染症、慢性疾患、ユニバーサルヘルスカバレッジ、環境問題などについて学びます。海外へのフィールドワーク、インターンシップを通して、グローバルヘルスの課題に対して貢献する研究能力やリーダーシップの技術を磨きます。WHOなどの国際機関や政府機関、NGO、JICA、アカデミアなどで活躍するグローバルヘルスリーダーを育成します。

ウィメンズヘルス 教授 森 明子

各ライフステージにおける健康課題、疾患や障がいと生殖の問題、それらに直面する女性とパートナー、子ども、コミュニティを対象とした看護ケアを追究します。性教育、家族計画、不妊ケアなど、リプロダクティブ・ヘルスにおける昨今の社会的要請にこたえる支援に取り組んでいます。研究と実践を連動させ、ウィメンズヘルス看護に大きく貢献できる人材として母性看護専門看護師や研究者を育成します。

看護統計学 准教授 八重 ゆかり

ランダム化試験デザインの原理と実際、用いられる統計解析手法の基礎(検定と推定の理論、P値と信頼区間、各種検定法の理論、および生存曲線の解釈など)、またランダム化試験計画書の構成・内容を学び、研究デザインと統計解析手法に関する理解を深め、両者が不可分の関係にあることを確認します。さらに実際の英文研究論文を批判的に読むことで、主な疫学研究デザインの種類と特徴、用いる主な統計解析手法についても学びます。

公衆衛生看護学 教授 麻原 きよみ

公衆衛生看護学は、社会や組織・集団に働きかけ、個人や家族への支援と社会・組織・集団への支援が連動するところに特徴があります。行政・産業・学校・その他の公衆衛生看護領域における人々の健康、および保健・医療・福祉システムに関する諸課題について、さまざまな視点から捉え、対応するための、またよりよい実践のための方法論を探究・創造していきます。自立・自律した実践力と研究能力の修得を目指します。

看護社会学 教授 伊藤 和弘

現代の代表的な社会学理論や哲学にみられる人間存在のあり方、人間関係のとらえ方、身体論などにかかわる諸論点の考察に焦点をあてて探求します。また、そうした理論や哲学を具体的な看護現象に適用した考察や、社会学や哲学にもとづく質的な研究方法などを検討しています。

看護心理学 教授 廣瀬 清人

実践的な研究の方法論(前期)および徹底的行動主義のケアへの応用(後期)を2つのテーマにして考察します。前者では、面接法、観察法、質問紙法に加え、フィールドワークについて検討します。後者では、誤解されがちな徹底的行動主義を深く理解し、ケアへの応用の可能性を模索します。前期は、具体的な研究遂行への導入となります。後期は実践の幅を広げることを目指しています。

看護理論・研究法 特任教授 田代 順子

大学院で学ぶ専門看護師、看護研究者の基盤能力である看護の知の形成を科学的なアプローチを使って遂行できる能力を養う領域である。主に、看護理論(看護の知)の形成プロセスや今日使われている理論業績を学ぶ。看護モデル、概念、中範囲理論の構築法を基盤に大学院生の研究の枠組みを形成できるよう科目を提供し、研究法ではその検証の方法を基盤に研究を助ける。研究領域の研究としては、看護で使われる概念分析、これまでの研究文献のシステマティックレビューにより、看護エビデンスを構築する。

周産期看護学 特任教授 宮坂 勝之

麻酔に関わるすべての場面(術前・術中・術後)で患者が安心して治療に取り組めるように、確かな知識と技術を持って支援できる能力の修得を目的としています。そこで、麻酔や手術に対する人体の反応を理解するための生理学、生体侵襲学、心理学的諸理論等を修得し、さらに、それらの反応を最適化するためのさまざまな方法について幅広く修得します。実習を通し、多様な実践の場で高い臨床実践能力を活躍できる能力を育成します。

助産学 教授 堀内 成子 教授 片岡 弥恵子

女性を中心に、パートナー、子ども、家族、コミュニティを対象とした助産ケアを追究します。妊娠・分娩・産褥・新生児期のマタニティ・サイクルにおける助産ケアの質向上を目指すほか、性暴力被害者支援、ペリネイタル・ロス支援など社会の片隅に追いやられている課題にも取り組んでいます。国際母子保健に関する研究や、助産管理、助産教育に関する研究も行っています。エビデンスを<創る><使える>人材を育成します。

看護情報学 教授 中山 和弘

多岐にわたる健康・医療情報に翻弄されず、市民や患者が適切に意思決定し、生涯を通じて学び成長できるための支援を目的としています。そのために、健康問題やストレスに直面しても、社会の一員として、自らの目標を達成し、潜在的な力を成長させることとしてのヘルスマネジメント(適確に情報を入手、理解、評価、意思決定・行動する力)について研究します。そこで必要となる、意思決定、ヘルスポモーション、ヘルスコミュニケーション、健康社会学の理論と社会調査・統計学の知識とスキルを修得します。